S. Ashina

＜前回＞オリエンテーション

Ａ．テーマ：キリスト教と社会理論の諸問題（２）

Ｅ．講義スケジュール

前期：キリスト教と近代的知――宗教哲学構想

オリエンテーション――「キリスト教と近代社会の諸問題」 4/8

１．前年度のまとめ――象徴論・言語論

１－１：人間存在と象徴・言語――象徴を操る動物としての人間 4/15

１－２：言語と実在・真理 4/22

１－３：人間的現実の構成――隠喩・モデル 5/6

２．近代/ポスト近代と宗教哲学構想 5/13, 20, 27, 6/3, 10, 17, 24, 7/1, 8, 15, 22

・近代以降の知的状況における宗教思想

・批判哲学、自然主義・非実在論、批判的実在論

・シュライアマハー

・波多野とティリッヒ

・リクールとヒック

・言語論と宗教哲学

・次元論と宗教哲学

後期：キリスト教と社会理論――経済と環境

Ｆ．キリスト教と近代社会の諸問題―経済・公共性・環境―

アーレント（政治・公共性、経済・私的、社会化）、ウェーバー・テーゼ

３　聖書と経済、そして環境

これまでの議論から明らかになったことは、近代社会とキリスト教との関わりを明らかにするためのポイントの一つが、経済あるいは富の問題であるという点であった。キリスト教と経済の関係は、キリスト教史全般におよぶ問題であり、それに正面からアプローチするには、かなり大規模な研究計画と共同研究体制が必要になる――キリスト教史の各時代に関して、参照すべき研究はかなりの量に及んでいる[12]――。ここでは、聖書における富・経済に限定し、しかも、いくつかの研究文献を参照することによって、問われるべき論点を指摘したい。

聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えが存在するが――知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される――、しかし他方、預言書や黙示文学には、貧富の格差や不正という観点からの富あるいは富者に対する強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖書の富者批判を受け継いだ議論（福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録）から、富自体よりもむしろ富に固執する欲望を批判する議論（パウロ書簡、牧会書簡）まで、様々な見解が存在する。

この点については、概略において、おそらくかなり広範な研究者の賛同が得られるもの

と思われるが、例えば、ヴィザリントンは、ソンドラ・ウィーラー（Sondra　Wheeler）の研究を紹介しつつ、次のようにまとめている[13]。

ユダヤ文献は全体として単純に富と豊かさに賛成しているわけではない。また、新約聖書も全体として、生活の中で所有を行い何らかの財産を持つことに単純に反対しているわけではない。証言はより雑多で複雑である。……ウィーラーは旧約聖書が富と豊かさについて語ることを次の４つの表題のもとに要約している。

1. 偶像崇拝の原因としての富（Deut.32:10-18; Isa.2:6-8;3:16-24; Jer.5:7; Ezek.7.19-20; 16:15-22: Hos.2:5-9; Amos 6:4-7）。預言者は富が偶像崇拝へ導く危険性について警告する。……
2. 不正の果実としての富（Isa. 3:14-15; 10:1-3; Mic.6:10-12; Jer.5-27-28; Amos2:6; 4:1-2）。……
3. 忠実さの印としての富（Lev.26:3-10; Deut. 11:13-15; Isa.54:11-12; 60:9-16;Jer.33:6-9）。……
4. 重労働の報酬としての富（Prov.10-21）。知恵文学においては、労働とその報酬がしばしば怠惰と対比されている。……（Witherington、2010、13）

では、新約聖書において、富に関する基本的テーマはいかなるものであろうか。ウィーラーは再び次の４つを挙げる。

1. 躓きの石としての富（Luke 18:18-30）。……
2. 信仰心と競合する対象としての富。福音書においては、人があまりにも所有に引きつけられるとき、選択が迫られる。なぜなら、神と富の双方に兼ね仕えることはできないからである（Matt. 6:24; Luke 16:13）。……
3. 人間の必要の資源としての富。これは、新約聖書においてきわめて根強いテーマである。……（ibid., 14）
4. 経済的不正の兆候としての富。……（ibid., 15）

以上の多様性を念頭に置きつつも、「富をため込み、大々的に生活することを現代のキリスト教徒が自己正当化する傾向にあることについて、その根拠を新約聖書の内に求めることはまったくできない」（ibid.）のは明らかである。つまり、聖書全般に関しては、基本的に、次の点が指摘できる[14]。1.不正義や過剰な欲望と結びつく富は否定される。現代人の貪欲の正当化を聖書的に行うことは困難である。2.聖書においても、富あるいは富者についての言説は共同体（たとえば教会）が置かれた社会的文脈に相関している。キリスト教史においては、共同体が経済的政治的な権力構造との結びつきを深めるにつれて、富自体への否定的見解は後退する傾向が見られる。これは、キリスト教の制度化や国教化がもたらした国家権力との関係変化と無関係ではない。

富の問題は、キリスト教をその現実性に即して問う場合に避けて通ることができない。特に 1990 年代以降の冷戦後の世界において、キリスト教は様々な対立と紛争に関与するものとしてしばしば批判されてきたが、そこには、経済的要因が深く複雑に絡み合っており、こうした議論に対して有意味な論究を行うには、聖書と経済・富との関係を整理することが必要である。さらに近年、これにもう一つ別の要因、つまりリーマン・ブラザース

の破綻によって引き起こされた金融危機が加わった。こうした政治的経済的な変動の中から問題化したのが、新自由主義の評価である。ヴィザリントンは、先に引用した文献において、なぜ、今、富の問題を論じるのか、について次のように述べている。

> なぜ、お金について本を書くのか、しかもなぜ今なのか。なぜなら、われわれの経済が暴落しつつあるからである。われわれは少なくとも不況に入り込みつつある。……今や、われわれはより少ないもので生活することを学ばねばならない。……今こそ、われわれにとってのお金の意味とその使い方（そして、お金によって働かされる仕方）について再考し、とりわけイエスとその最初期の弟子たちが富と所有について実際に教えたことを新たに見直す良い機会かもしれない。それが必要な時でさえあるだろう。(ibid., 7)

キリスト教思想研究者を含め、思想的（神学的、倫理的など）観点から、富、財産、所有、そして経済を問うという最近の動向の背後には、いわゆる新自由主義経済（市場原理主義）への懐疑、疑問、批判が存在する[15]。もちろん、経済あるいは政治における自由主義をめぐる議論は錯綜している。そもそも自由主義は実に多義的な概念であり、慎重な検討が必要なことは言うまでもない[16]。しかし、自由主義の多義性はそれ自体が問題であるとしても、近年、聖書との関わりで経済が問われる場合、その背景として、新自由主義という用語に集約される経済危機と、さらにはそれと結びついた環境危機という二重の危機が存在していることは否定できない。こうして浮かび上がってくるのは、経済と環境という問題連関である。

「経済と環境」という問題連関は、環境論（キリスト教的環境倫理）の側からも確認できる。なぜなら、環境論が現実的な有効性を獲得するためには、政治的経済的な諸問題との関連性を確保することが必要だからである（環境論は自然科学の範囲内で完結しない）。これは、アメリカの神学者カブらが指摘するように、環境論と経済学という用語がギリシャ語同一語根（oikos →エコ）に基づくことから予想される通りである――「用語的に、両者はきわめて直接的に関係づけられる。一方は家（oikos）のノモス（nomos）であり、他方は家（oikos）のロゴス（logos） である。」（Cobb、2000、499） ――[17]。韓国の神学者チャン（Yoon-Jae Chang、梨花女子大学教授）は、2009 年 6 月 27 日に同志社大学で開催された「日中韓神学フォーラム」の講演で、「わたしは、環境論的危機と経済学的危機を一つの危機と見ている」と述べている[18]。それは経済と環境との関連性を示唆したものにほかならない。

経済と環境の関連性については、かなり広範に問題意識の共有が見られるが、ここでは、聖書との関わりという点から、「スチュワード精神」（Stewardship）に注目することにしよう。キリスト教思想における経済をめぐる最近の議論において、論拠として言及されるのが聖書の人間理解であり――当然と言えば当然ではあるが――、その中心に置かれるのが、「スチュワード精神」なのである。たとえば、山本栄一は、『問いかける聖書と経済』において、自律的人間という近代における人間像に対して、聖書的人間像を、次のように説明し、そこから現代の経済を論じている[19]。

> 人が神と共に、同時に、人と共に生きるという、「共同体」的な生き方が本質にある

ことは、創世記の言うところである。従って、人間の生き方は、この共同体におかれている人間の任務が優先されるのであって、個々人が自らで自由に選択できるものではない。その任務は「スチュワード(steward)」といわれ、主人の財産を忠実に管理する「執事」「家令」といわれるものである。(山本、2007、55)

現代の経済社会では、「スチュワード」という用語は用いられていないが、その意味する内容はさまざまな分野に息づいている。近年、「企業の社会的責任」といわれる問題が注目されている。……このような状況において、「スチュワード精神」、あるいはスチュワードシップを、ある意味で、市場への参加者に「仕える」者(スチュワード)のあり方であると理解するとき、このような精神は企業をマネージする者の基本的あり方を指すものといえる。(同書、103)

「スチュワード」としての特性については、第八戒と第十戒から、「正義」の実践を何よりも重要なこととして取り出すことができる。(同書、104)

経済主体におけるスチュワードシップは、決して古色蒼然としたものではなく、現代の経済社会を、「正義」と「愛」が貫かれた活力ある社会へと変革させる「空気」のようなものとして必要とされているのではないか。(同書、110)

人に賦与されたストック量を維持・管理するスチュワードシップとは、そのストック量を摩耗させないで維持するだけでなく、純増を生じさせる「豊かさ」を求めて管理していくことを意味している。(同書、220)

こうしたスチュワードシップ理解に基づいて、山本はキリスト教的経済論として「市場経済の公共化」(同書、221)を構想するのであるが、同様の議論は、スタックハウス(Max L. Stackhouse)の一連の論考にも見出すことができる。それは、スタックハウスが、『公共神学と政治的経済』を総括しつつ[20]、「わたしが本書を通じて論じてきたのは、われわれがとりわけ神の言葉(the Word)のスチュワードたることを求められているということであった。そして、そのことは聖書、伝統、理性と経験という古典的な根拠から、公共神学を再生し作り直すことの必要性を伴っている」(Stackhouse、1991、174)と述べている通りである。こうした議論が示唆しているのは、経済あるいは社会という公共領域を、聖書的な人間理解(スチュワードとしての人間)と統合し直すという課題なのである。

もし、スチュワード精神が聖書的な人間理解に依拠したものであるならば、それは、当然経済の問題領域にとどまらないことになる。実際、環境論においても、聖書との関わりは別にして、スチュワード精神が問題にされてきた。パスモアは、『自然に対する人間の責任』において[21]、環境論という視点から、西洋の伝統的人間観として、「専制君主としての人間」と「スチュワード」としての人間という二つを取り上げている。パスモア自身は、「スチュワード精神」は、「ローマ帝国時代の新プラトン主義の哲学者」に遡るものであり(Passmore、1974、28)、キリスト教との関係については、「キリスト教の教えに対してそうした解釈を支持する証拠はあるだろうか。それはほとんどない、と私は言いたい」(ibid.,29)と述べている。パスモアのこの文献は、リン・ホワイト以降の聖書の創造物語(キリスト教的創造論)と環境危機との関連性をめぐる論争史の中で重要な位置を占めるものであるが、1980 年代以降の議論は、パスモアの上記の主張を修正するものと言える。つまり、パスモアは、聖書の描く「人間のスチュワード精神」は、「教会に関係する

ものではあっても、自然に関係するものではない」（ibid.）と述べるが、しかし、他の生命へ責任を持って配慮するという人間像は、それが西洋キリスト教思想においてどれほどの位置を占めてきたかは別にして、聖書自体において明瞭に確認できるのである[22]――パスモアも、こうした解釈が「最近では」「支持を受けるようになってきている」（ibid., 9）ことは認めており、パスモアのこの著書が、スチュワードシップ概念の転換という過渡期に位置することを示している――。スチュワード精神の担い手という聖書的な人間像は、人間相互の関係性（経済を含む）だけでなく、他の生命との関係についても妥当するのである。経済と環境という問題は、聖書的なスチュワード的人間という視点から見ることによって、本来一つの問題連関を形成することがいっそう明らかになる。それは、キリスト教的経済倫理が環境論との連関を要求することにも反映されている。東方敬信『神の国と経済倫理――キリスト教の生活世界をめざして』において[23]、「環境と産業社会」（東方、2001、186-206）が論じられるのは、偶然ではない。「消費主義の蔓延している世俗社会は、クオリティー・オブ・ライフについて、あの聖餐式の神の自己贈与にもとづく、人間同士の感謝と相互贈与を認めるときが来ているのである」（同書、200）との主張は、経済におけるスチュワード精神の問題であり、「パウロは、被造物の叫びのなかに自由へのあこがれを聞いた。自然は、神の子たちの現われるのを待っている。それは愛の神による配慮にみちたシンプル・ライフであろう」（202）は、自然との関わりにおけるスチュワード精神の問題なのである。先に、聖書における富の理解の多様性を指摘する際に、ヴィザリントンを取り上げたが、そこで参照されていた、ウィーラーが、キリスト教倫理という視点から、二つの著書『危険と義務としての富』（1995 年）、『生命のスチュワード』（1996 年）を続けて出版していることは[24]、経済と環境との連関を示唆するものと言えるかもしれない。

スチュワード精神という聖書的人間理解に関しては、今後、たとえば、キリスト教思想内部での（マクフェイグなど）、あるいは倫理学一般における（たとえば品川哲彦など）、ケアの倫理との関わりを含め、さらなる展開が求められる[25]。

４　キリスト教・経済・環境――カブの場合――
５　むすび

１．前年度のまとめ――象徴論・言語論

１－１：人間存在と象徴・言語――象徴を操る動物としての人間

１．人間から議論する（近代的思惟）
　哲学的人間学
　　人間をいかに論じるか
　　「人間と神」→「人間と動物」
　　人間的現実（人間にとっての現実、生きた人間の現実）
　　↓
２．自然と歴史　　cf. 超自然
　自然主義と歴史主義の二重性（分岐・対立しながら結合している）

大木英夫『新しい共同体の倫理学　基礎編・上下』教文館。
世界の＜歴史化＞としての近代化

３．言語論・言語哲学の二つの流れ
歴史言語学／共時的言語学（ソシュール）
解釈学／構造主義
↓
現代哲学と言語論、言語論的転回（Linguistic turn）
認識を含めた人間的現実性の全般が言語的であること、言語的な構成によること、これが、20 世紀哲学のいわば共通認識となる。
近代哲学（認識論的問題設定）との差異

４．合理主義的神論から哲学的人間学・宗教論へ。カントとシュライアマハーの宗教哲学。
「批判主義はその主義と精神とをカントから継承する」、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、それの理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究することに、批判主義の根本精神は存在する」、「カントは先ず『純粋理性批判』において、かかる新しい方法、新しい態度を学問の範囲について提出し、遂行した。そして彼は次第に道徳や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった。宗教に関する彼の議論は、幾分の不完全と不徹底とを免れ難いが、しかも原理的には同一の精神に立脚しておるということができる」、「カントにおいて、宗教哲学が批判主義の指示す新しい道を出発し、進行しておるのを見るのである」（波多野精一「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）、201頁）
「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異なって、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」（201）

５．カッシーラーの象徴形式の哲学
人間は象徴を操る動物である。
人間による人間的世界・現実の構築。その形式としての象徴
カント批判哲学の拡張・拡大適用

Ernst Cassirer, *Die Philosophie der Sybolischen Formen*, 1923, 25, 29.
Bd. I. Die Sprache
II. Die mythische Denken
III. Die Phänomenologie der Erkenntnis
, An Essay on Man, Yale University Press, 1944.

６．Cassirer(1923)
In dem Maße, als sich diese Einsicht in der Wissenschaft selbst entfaltet und durchsetzt, wird in ihr der naiven Abbildtheorie der Erkenntnis der Boden entzogen. Die Grundbegriffe jeder Wisschenschaft, die Mittel, mit denen sie ihre Fragen stellt und ihre Lösungen formuliert,

erscheinen nicht mehr als passive Abbilder eines gegebenen Seins, sondern als selbstgeschaffene intellektuelle Symbole. Es ist insbesondere die mathematisch-physikalische Erkenntnis gewesen, die sich dieses Symbolcharakters ihrer Grundmittel am frühesten und am schärfsten bewußt geworden ist. Heinrich Hertz (5)

wird jetzt nach einer Regel gefragt, die die kontrete Mannigfaltigkeit und Verschiedenheit der Erkenntnisfunktionen beherrscht und die sie, ohne sie aufzuheben und zu zerstören, zu einem einheitlichen Tun, zu einer in sich geschlossenen geistigen Aktion zusammenfaßt.

Sie ist eine Gestaltung des Mannigfaltigen, die von einem spezifischen, damit aber zugleich von einem in sich selbst klar und scharf begrenzten Prinzip geleitet wird. (8)

Dies gilt für die Kunst, wie es für die Erkenntnis gilt; für den Mythos wie für die Religion. Sie alle leben in eigentümlichen Bildwelten, in denen sich nicht ein empirisch Gegebens einfach widerspiegelt, sondern die sie vielmehr nach einem selbständigen Prinzip hervorbringen. Und so schafft auch jede von ihnen sich eigene symbolische Gestaltungen, die den intellektuellen Symbolen, wenn nicht gleichartig so doch ihrem geistigen Ursprung nach ebenbürtig sind. Keine dieser Gestaltungen geht schlechthin in der anderen auf oder läßt sich aus der anderen ableiten, sondern jede von ihnen bezeichnet eine bestimmte geistigen Auffassungsweise und konstituiert in ihr und durch sie zugleich eine eigene Seite des "Wirklichen." (9)

７．Cassirer (1994)

Man has, as it were, discovered a new method of adapting himself to his environment. Between the receptor system and effector system, which are to be found in all animal species, we find in man a third link which we may describe as the *symbolic system*. This new acquisition transfroms the whole of human life. ・・・he lives, so to speak, in a new *dimension* of reality. There is an unmistakable difference between organic reactions and human responses. (24)

Man cannot escape from his own achievement. He cannot but adopt the conditions of his own life. No longer in a merely physical universe, man lives in a symbolic universe. Language, myth, art, and religion are parts of this universe. They are the varied threads which weave the symbolic net, the tangled web of human experience. All human progress in thought and experience refines upon and strengthens this net. No longer can man confront reality immediately; he cannot see it, as it were, face to face. (25)

Reason is a very inadequate term with which to comprehend the forms of man's cultural life in all their richness and variety. But all these forms are symbolic forms. Hence, instead of defining man as an *animal rationale*, we should define him as an *animal symbolicum*. (26)

８．Clifford Geertz, *The Interpretation of Cultures*, Fontana, 1973.

Believing, with Max Weber, that man is an animal suspended in webs of significance he himself has spun, I take cultures to be those webs, and the analysis of it to be therefore not an experimental science in search of law but an interpretive one in search of meaning.（5）

９．カッシーラーの象徴論の問題点

・批判主義の徹底は、宗教的実在性にとっては、両義的なものとなる。実在性が人間的レベルへの還元されることによって、実在性の議論が排除される。

→批判的実在論、意味論あるいは意味の形而上学

ティリッヒあるいは波多野のカッシーラー批判の論点。

・象徴形式の哲学は包括的すぎる。厳密な分析をスタートさせるには、典型的な地点を確定し、そこから出発しなければならない。

→言語論・言語哲学へ

10. 象徴：言語的契機と非言語的契機（リクール）

Paul Ricoeur, "Parole et symbole" 1975.

↓

言語論から人間存在へのアプローチ

11. Paul Ricoeur, *Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*, The Texas Christian University Press, 1976.

Discourse considered as either an event or a proposition, that is, as a predicative function combined with an identification, is an abstraction, which depends upon the concrete whole that is the dialectical unity of the event and meaning in the sentence. (11)

If all discourse is actualized as an event, all discourse is understood as meaning. By meaning or sense I here designate the propositional content,

If language is a *meinen*, an intending, it is so precisely due to this *Aufhebung* through which the event is cancelled as something merely transient and retained as the same meaning. (12)

＜参考文献・和書＞

言語学一般、隠喩論、宗教言語論、神学的言語論などの文献は別にして。

１．言語論と現代哲学（とくに論理学・分析哲学の分野）

飯田　隆『言語哲学大全』Ⅰ（論理と言語）、Ⅱ（意味と様相、上）、Ⅲ（意味と様相、下）、Ⅳ（真理と意味）、勁草書房、1987～2002年。

神野慧一郎編『現代哲学のフロンティア』(1990年)、『現代哲学のバックボーン』(1991年)、勁草書房。

２．分析哲学から現代思想全般へ

野家啓一『言語行為の現象学』(1993年)、『無根拠からの出発』(1993年)、『科学の解釈学』(1993年)、勁草書房。

３．解釈学的哲学（ドイツ哲学の言語論）

ガダマー『真理と方法　ⅠⅡⅢ』法政大学出版局。

麻生　建『ドイツ言語学の諸相』東京大学出版会。

塚本正明『現代の解釈学的哲学』世界思想社。